# 細腕異世界繁盛記（なんちゃってっ）

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
細腕異世界繁盛記（なんちゃってっ）

【Ｎコード】
Ｎ５３０８Ｗ

【作者名】
まめ太

【あらすじ】
『金融王の旅団』補足説明編。本編リグ視点ではなかなか語れない裏話など収録予定。いや、単なる思い付き。

## 豚にどんぐりを食べさせる月、１日目（前書き）

今日から、日記を付けようかと思います。ｂｙ一条綾香

## 豚にどんぐりを食べさせる月、１日目

その日、ジェットコースターに乗ったのは間違いでしたっ。

いいえ、百歩譲って、友達と遊園地に行ってジェットコースターに乗ったまでは正しかったとして、お隣になった男の人を見て、体重１００ｋｇあるんじゃないの！？とか思った瞬間に、乗るのを遠慮しなかったのは間違いでしたっ！

いえいえ、１００ｋｇ超の男の人と同席になったのは百歩譲ってオケとしても、安全バーがユルユルのスカスカになった時点で……なんで巡回してきた係員さんに助けを求めなかったかな、あたし。

後悔しても、しても、しても、どーにもならない現実ってのは、もう考えるのも嫌なのでパース。

大回転ループに入った直後にあたしの身体はコースターから放り出され、死にたくないって祈ったらなぜか大海原にダイビングしてしまってたのでした。

助かった？　あはは。そう思いますか〜。ぜんぜん助かってないっ☆

見渡す限り、海、海、海、ですよっ。３６０度、パノラマってゆーんですか？　見渡す限りでなぁんにもないっ。果てしなく大海原〜。

これってオワコンとか言うよね。

最初は突然海に放り出されたコトを疑問に思ったり、泳いで島とか見つけようか、船とか通りかからないかなとか結構余裕で浮かんでたんですけどね。とりあえず泳いでればなんとかなるとか甘いこと考えてさ。

ぜんぜん甘かったのですよ、ここは「ザ☆大海原」、圧倒的死亡

フラグ。……今でこそ解かるんですけどもね、海って怖いトコなのです。
泳げど泳げど、なんにも見えてこない、誰も通ったりしない。と、解かってきて半泣き。
あの絶望感はアレですね、もう二度と経験したくないっ。

どんどん苦しくなる呼吸に、手も脚も、もうぜんぜん重くって、動かすと痛くって。
息を吸おうとしてるのに、空気の代わりに海水がガバガバ入って、咽て、さらに苦しくなって。
遂に力尽きて、海に沈んでしまう一瞬には羽根の生えた天使なんか見えちゃったりして。
こんなに苦しんで死ぬのなら、ジェットコースターから落ちた時にサクッと頭でも打って死んだ方がマシだったんじゃないかなー、なんて思っていましたっ。

でもね、死んだと思ってたら生きてたんです、あたし。
通りかかった船に助けられたんだそうです。感謝します！　神様にも、船の人にも、天使様にも！
あ、天使だと思ったのは実は生きた人間の人でした。んにゃ……人間？？？　えーと。なんだかよく解かんない生物。
背中に大きなグレーの翼が生えた人です。船の上には、そりゃもぉ、魑魅魍魎……いえ、有象無象……うーん、なんて言うか、妖怪ランド？
頭がライオンの人とか、頭と手と足がニワトリな人とか、そのまんまイグアナ二足歩行な人とか。その中で、わたしが天使と見間違えた人だけが辛うじて人間っぽいトリの人とゆーか。
そのトリの人がわたしを助けてくれたみたいなんです。
もう、船の上はファンタジーな世界で……どうやらここはラノベで読んだ異世界ってヤツで間違いないですねって感じで、泣きたく

なったもんです、あの時は。

言葉がまったく通じないというのは、本当に大変なんですよね。実際にそういう経験をしないと解かんないもんなんだー、と、今回のことでよぉっく解かりました、あたし。

一生懸命、あたしに話しかけてくれる人たちが、だんだんと機嫌が悪くなってゆくわけですよ、言葉が全然通じないってのは。なんか頼まれたんだと思うんですけどね、言葉が解かんないから、なにをすればいいのか解かんないじゃないですか、にこっとか笑って誤魔化したら、怒鳴られてしまいました。

玉ねぎとナイフを渡されたのですよ、皮を剥けという意味ですよね？　今なら解かります。ええ。

でも、その時はもぉパニックになっちゃってて、なんにも出来ずに半泣きになってオロオロするだけで。だから、あたしはどうやら売られてしまったようでした、例のトリの人に。

あんまりにも役立たずだからですよ、今だから解かるんですけどね、これも。

いかにも大金入ってますよー、て感じにジャラジャラ音のする大きな布袋を目の前で手渡してるのを見たら、どんな鈍感娘だって、売られたんだー、てくらい解かるでしょ？

でも、売らないでくださいっ、て必死に頭を下げてお願いしたら、なんか解かってもらえたみたいなんです。

で、トリの人に連れられて来たのが、この村なんですね。ここの雑貨屋のおばあちゃまにあたしは預けられたのです、「金返せよ、」て。

あ、金返せは後でおばあちゃまに教えてもらって解かったことなんですけどね。

だから、なんとかしてお金を稼いで、あの人に借金を返さないと

いけないんです。
あのトリの人……リグ・マイヤーさんに。
おばあちゃまのお陰で、あたしは何とかこっちでやっていけるくらいには、言葉も習慣も覚えることが出来ましたっ。おばあちゃまは昔、学校の先生をやった事もあるんだそうで、教えるのは得意なんだとか。
お陰で今のあたしは不自由なく誰とでもお話が出来ちゃいますっ。……実は。おばあちゃまの勧めで、公用語の他の、民族語の幾つかも勉強中ですっ☆
異世界なんて初めてだけど。
がんばりますっ。

## 豚にどんぐりを食べさせる月、２日目

今日は、この世界の大まかな種族関係というものを勉強しました
っ。

えーと。

まず、人間とエルフは仲が悪い。
人間とドワーフも仲が悪い。
人間と人魚も仲が悪い。
人間と半漁人も仲が悪い。
人間とバードマンも仲が悪い……。
もしかして、人間って四面楚歌？？？
「人間と人間も基本的には仲が悪いから、別に問題はないね。」
て、おばあちゃま、それ大問題だからっ！

「いいかい、アヤカ。あんたの国は平和だったようで結構なことだが、それをこの辺りの国々にまで当てはめて考えてると、いつかあんたは殺されるよ。」

ごくり。

そ、そんなコトくらいは弁えているのですよ、ええ。

この世界はどこもかしこも危険だらけだから、取りあえずは軍事力の強化をしましょう、という国同士の暗黙の了解があるのです。とにかくこの世界じゃ、人間より強い生物が溢れかえっているのですね。だから、話し合いで解決出来る部分は極力話し合いで解決して、軍事力はもっぱら話し合いが不可能な相手にぶつけましょうね、という決まりごとがあるのです。……て、合ってるよね？　おばあちゃま。

話し合い出来ない相手というのは、魔獣という生き物だそうです。ものすごく強い魔物なんだそうですが、あたしはまだ見たことがあ

りません。
　だから、基本的には仲が悪いエルフとかドワーフとも、表面上は仲良く付き合っているのですよ、この世界の多くの人々は。
　わたしが元々居た世界だって似たようなものだったわけで、どこも大して変わらないという話ですね。
　エルフとかドワーフとかは魔法が使えて、魔法が使える者達は「魔族」と呼ぶそうです、「人間」と区別しているらしいです。
「種族の分類は、特殊なルールを含む場合も多い。それに混血問題もあるからね、大した意味もないから細かいことは覚える必要はないよ。」
　おばあちゃまはそう言って、ほんとに大雑把な事しか教えてくれませんでした。
　バードマンというのは男性の鳥人間を指していて、女性の鳥人間はハーピーという、とかいうルールです。他にも、マーメイドや人魚というのは女性だけで、男性はシーマンとか半魚人というそうです。
　バードマンというのは、例の、あたしを助けてくれたトリの人ですね。あと、一緒の船に乗ってたニワトリの人とか。
　トリの人、改めまして。リグはバードマンです。
　魔族というのは皆さんとっても美形です。リグもとってもハンサムさんです。
　だけど、しょっちゅう半裸でうろつくダメな大人です。女の子の前なんだから、ちょっとは考えて欲しいです。『残念な男前』という人です。
　でも、バードマンという種族は元々そういう露出趣味なヒトタチだそうで、だいたい半裸か半分トリの姿で過ごすんだそうです。ニワトリの人がそうでした、よく出来たニワトリの着ぐるみだと思っていましたが、あれがデフォルトだそうです。個人の趣味で半分トリだったり人間だったり全部トリだったりするんだそうです。

もふもふの人もこの前見かけましたっ。半分以上オオカミでオーバーオールを着ていたので、とってもファンタジーでしたっ。（ちょっとヤケ

この世界の人々にとっては、それってぜんぜん普通なのです。だから、リグもおばあちゃまも何も不思議だなんて思っていないのですよ。ドラゴンが畑で麦踏みをしててもっ。
いいえ、あれは麦踏みじゃないです、麦ローラーです、畑でごろんごろんしてる紅い鱗ローラーですっ。
「春先には火炎放射器になるよ、畑を焼いて害虫処理をしてもらうのさ。便利だよねぇ、ドラゴン。」
ちょっと……あたしが知ってる異世界と違いすぎてますっ。
ドラゴンってもっとこう……ああ、イメージがガラガラと崩れていく光景が今も窓の外に。

あおーん、あおーん、て泣いてます。害鳥避けの網に絡まっちゃったんですか、そうですか。それ破いたらおばあちゃまに怒られますもんね、動けないからって瞳を潤ませてこっち見ないでください。
喋れるくせに。
「へるぷみー。」
ちょっとまって。これ書き終えてからね。
ドラゴンさんは人間の心を読んでしまう能力を持っているそうです。テレパシーですね。
「てれぱしーですね。……はやくー。」
もうっ☆

ちょっと中断してしまいましたっ。
あのドラゴンは、ノイッシュさんという名前です。
お隣に住んでいる男の人……雄のドラゴンです。人間に化けたらやっぱり美形ですが、滅多に人の姿にならないみたいです。いつも

ドラゴンのまんまです。
　ドラゴンは一つの土地に居付いたりはしないらしいので、なにか理由があって期間限定でこの村に住んでいるんだろうって、おばあちゃまが言っていました。
「アヤカを護るためだよ。」
　嘘です。ミートパイを丸呑みするためです。
「ミートパイ好きなんだもん。」
「窓から入ろうとしないでっ！　家が壊れるから、人間型以外お断りですっ！」
「ちぇっ。」

　ちゃんと人間の姿で来てくれたら、いくらでもミートパイをご馳走してあげるのですけど。
　机ごと食べるミートパイより、断然、ミートパイだけ食べてくれた方が美味しいという自信がありますっ。

## 豚にどんぐりを食べさせる月、３日目

「ドラゴンは、二種類がいるよー。」
　窓の外からノイッシュさんが喋っています。今日は仕事が早めに終わったので、あたしの授業に付き合ってくれているのです。この世界の歴史のお勉強です。
「竜族というのは魔族のことでー。ワイバーンという、前足が翼になってるタイプと前足後ろ足の他に翼が生えてるドラゴンとは別の生物だよー。ワイバーンは知能が低くて人にもならないから魔獣の括りでねー、ドラゴンは魔族だねー。ワイバーンよりドラゴンのが基本的には強いとされてるよー。例外ってのはどんな場合にもあるから、絶対じゃあないけどねー。
　ああ、それからー、そっくり同じ姿かたちで魔獣のドラゴンも居るから気をつけないとねー。」
　間の抜けた喋り方はなんだか聞いてて眠くなります。
　ええと、ドラゴンとワイバーンの二種類がよく似てるということですね、でも前者は魔族で後者は魔獣、その区別は人型になれるかどうかと知能による、ということらしいです。

　そういえば、人間の姿になれるからと言っても、人間の姿を好きかどうかはまた別問題なんだそうです。例えばドラゴンで普段から人間の形態をとっている者はほぼいなくって、それは彼らが人間を醜いと思っているからだそうです。
　毛皮？いだ肉みたいで気持ち悪いよねー、とか言われた時はショックでしたっ。
　あと、この村にもいる狼さん……獣人族も、人間はツンツルテンの猿みたいでみっともないと言って、もふもふのままみたいです。
　ああいう人たちは、毛皮が綺麗かどうかが大事なんだとおばあちゃまが言っていましたっ。

人間という生物のカタチがどう見えるかは個人差が大きくて、ノイッシュさんは人間をあんまり綺麗な生物じゃないと思ってるみたいなんです。

でもリグは人間のカタチが好きで、筋肉の付き方だとかにもコダワリがあるそうです。ぜんぶトリの姿というのも持ってるはずだけど、そっちはまだ見せてくれた事がないんです。

「魔族のヒトは、人間の姿と人間以外の姿と、どっちが本当の自分でどっちが化けてるだけの姿だと思ってるんですか？」

ちょっと複雑なんだけど、聞いてみましたっ。

「そりゃもちろん、こっち。」

即答でノイッシュさんが鼻息を吹きました。転げそうなくらい大きい息です。ドラゴンのノイッシュさんはこの家より大きいんですもん。

「人間の姿に化けるのは、擬態といってねー。昔むかーしに、人間に化けて近付いてって、捕まえて食べるのに便利だったからなんだよー。」

さらっとコワい事をにこやかに言わないでくださいっ。

「……今は食べないよ。骨ばっかりで肉付いてないもん、人間って。」

「ノイッシュさんの好物ってなんでしたっけ？」

「ミートパイ☆」

お肉は好きなんですねっ。

「最近、ドラゴンの間で流行ってる最先端の食べ方教えてあげるー。」

ノイッシュさんの言う流行ってドラゴン限定のことがあまりに多くて使えません、実は。

「ミートパイの上にスライムをてんこ盛りに乗っけて、パクッてー。とろーりとろーりでおいしいー。」

「え！？　スライムなんて食べられるんですか！？」
びっくりしました、スライムという魔物はジェル状の生物で、およそ斬っても叩いてもダメージを受けない恐ろしい敵なのですよ。小さな生物ならその身体に包み込んで窒息死させ、大きな生物なら体内に入り込んで中から毒素を放出して殺してしまう、もっとも注意するべき魔獣の一つなのです。とても丈夫な細胞で出来ているとか、防御魔力が高いだとか、理由は解からないけど強力な攻撃をかけてもビクともしないんだそうですー。
人間くらいの大きさなら余裕で包み込んでしまうんだそうですよ、怖い話です。
ドラゴンがこの世界でも一二を争うほど強い魔族というのは知ってますけど、スライムでさえ敵じゃないってことなんですか、なんだかものすごい話になってきた感じでワクワクしますっ。
「スライムの食感はサイコーだよー。とろーりとろーり。飲み込んだらツルーってー。お腹に沸いた虫とかも退治してくれるから、サイコー。」
ドラゴンってお腹に虫沸いちゃうんですかっ！？
「でー、寝てる間にいろんな穴から抜けて、どっか行っちゃうー。」
色んな穴からですか。……聞かなきゃ良かったです……。

「ドラゴンのハントってのはもう聞いたー？」
あ、はい、聞きました。竜族のヒトは同種のドラゴンに魅力を感じないだとかで、なぜだか人間を伴侶に選ぶ性質があるんだそうです。
昔からドラゴンが出てくる物語は多くって、お姫様や美しい村娘を攫っていくお話っていうのはだいたいが実話だったりするらしいです。
「惚れたら周りが見えなくなるからねー。お城ぶっ壊してお姫様掻っ攫ってトンズラー。追っかけてきた騎士とか王子とか焼き殺してランデブー。ヘラヘラ。」

ヘラヘラ、じゃないですっ。なんですか、その凶悪な生態はっ！？
「アルケニーとかマンティスはもっと酷いんだから、ドラゴンはまだマシー。」
鼻息で転がされそうです。
アルケニーは蜘蛛人間で女性だけだそうです、マンティスは魔獣じゃなかったかな？
蜘蛛女さんはまだ会ったことないから解からないですが、男性を捕まえて背中にくくり付けて生活してたりするんだそうです。飽きたら食べてしまうとか。怖い、怖すぎな女性です。
「アルケニーは美女ばっかりだし、フェロモン撒き散らしてるから男の方が寄ってくんだよー。で、彼女たちはねー、背中に乗っけてる恋人を陰では『お弁当』って呼んでるんだよー。」
いやー。今日は聞きたくないお話ばっかりー！
「だからー。魔族は人間に化ける必要が、どーっっっしても、あるんじゃないー。」
騙すためですか、文字通りの化けの皮ってことですか、なんて世界。ファンタジーが聞いて呆れますっ。
「えっ！？　でもでも、それって矛盾してますっ、ドラゴンは人間を醜いと思ってるはずでしょー！？」
「見た目で好きになるわけじゃないよっ、（キリッ」
カッコ良く言っても、迷惑なことに変わりはないというか……。
人間以外に知的生命が居るって、すごい事なんです。価値観が賑やかで滅茶苦茶って事なんですっ。これが正しい、なんていう一本道は誰もはなから信じていないんです。それぞれが好き勝手に主張していて、それでもなんだかバランスが取れているみたいなのは不思議です。
「ドラゴンもアルケニーもマンティスも、魔族って元々は人間の亜種だからー。人間と交尾していっぱい子供産ませて混血こさえて、

その中でもっとも強いのが跡取りー。
どっちの血が濃く出るかわかんないから、いっぱい産ませなきゃー。」
なんですか、その価値観っ。それじゃまるで人間って畑状態じゃないですかっ。
「だって、人間畑にしか魔族の種は蒔けないんだからしょーがないじゃーん。」
この世界って、ほんとに、ほんとに、大変そうですが頑張らなくっちゃ、です。

## 豚にどんぐりを食べさせる月、４日目

「今日は、国々の地理的な関連について教えてやろうかね。」
おばあちゃまはそう言って、古ぼけた羊皮紙を壁に貼り付けました。とても大きなものです。
それに、羊皮紙っていうか、書籍を含めてこういう記録媒体というのはとてもとても高価な品です。なんで田舎町の雑貨屋にあるのか、ちょっと不思議です。
「アヤカ。まず言っておかなきゃいけない事がある。」
「はい、おばあちゃま。」
なんだか、今日のおばあちゃまはいつもと違うんです。すごく怖い雰囲気でビクビクしちゃいます。

おばあちゃまは深く大きく、深呼吸をして、話を始めました。
「あんたはこの世界の人間じゃない、だけど、それを他人に言ってはいけないんだよ。」
え！？　驚きました、誰も理解してくれないと思ってた、『世界』の概念が、おばあちゃまには通じてしまいましたっ。
「リグは薄々勘付いてる、あいつは割と頭が切れるからね、まぁ当然だろう。ノイッシュはお前が竜族たちに知られた証拠に、ここへ来た。お前のお目付け役だね。」
え、お目付け……て、なんででしょう、わたし、何か拙いんでしょうか……。黙っておばあちゃまの話を聞くことにします。
「ドラゴンたちは安定を護る要としての役目を負っていて、なにか世界が乱れる要因が出来れば速やかにこれを排除しようとする連中なんだがね。それに見張られているってことは、つまり、お前の生き方次第では、すべてのドラゴンがお前を殺しにやってくる、という事になるんだ。」

「リグは、そうした事も見越して、あたしにお前を預けていった。30年前に居た日本人の話はもうしたはずだね？」
　わたしは黙って頷きます。
「均衡が破られそうになった為に……、あまりに急激な進化をもたらした為に、あの日本人は殺されてしまったんだ。公然の秘密、あらゆる国の頭の良い連中なら誰でも知っていることさ。
　この世界は、お前の居た世界ほどに人々が賢くはないんだよ。一部の為政者だけさ、まともな教育を受けているのは。だから、便利な品物は混乱のもとにしかならないから、要らないんだよ。
　強力な武器は戦争の種にしかならないし、便利な道具は奪い合いを生む、世界のバランスを崩す。
　現に、たった一人の日本人が遺した僅かな技術だけで、この世界は均衡を崩してあちこちが綻び始めている。大国を軍国主義に走らせ、競争原理が市民の生活まで脅かしたんだ。」
　日本人のその人が現れた国はとてもとても栄えたのだそうです、リグに聞きました。旧帝国領という国で、魔道士がそこでは一番偉いんだそうです。

「旧帝国が力を付ければ、傾いたバランスを元に戻すために他の国々も動き出す。けれど、そうして動いても追いつけないほどに急激に進化してゆけば、強さの均衡が崩れる。
　現に旧帝国はその勢いのまま、新領の方へ攻め入ったからね。ドラゴンの乱入で有耶無耶にならねば、新帝国は消え、かつての大帝国への統合復活が成っていただろう。」
　おばあちゃまは続けます、お陰で両帝国は一時期焦土と化した、と。
「そういうワケだからね、アヤカ。余計なコトは言っちゃいけないし、やっちゃいけない。わかったね。」
　念を押すようにそういうおばあちゃまに、わたしはコクコクと頷きだけを返していました。

「まず、世界の臍と呼ばれる島があってね、そこには赤く染まって見える巨大な塔が立っている。なんでそこが世界の中心なのかは解からない。大地がまぁるい事など、もう誰でも知ってるからね。およそ神話時代の名残とでも言うべきかで、とにかく『世界の中心にある島』なんだよ。

その周囲にも同じような巨大な塔が七つ建っているのは有名な話だ。何時、誰が建てたのかは解からない。ずうっと古代からあったそうだ。

お次は海洋だ、ここは恐ろしい魔獣の宝庫でね、全ての海を制して航海した者はまだ一人もいない。せいぜいドラゴンの背にまたがって、世界を一周したとかいう記録がある程度だ。交易が行われるほどに開拓されてもいないし、人間の住めない地域がわんさかとあるよ。」

この場合は、人間と魔族、混血を一括りにして、人類の居住可能な地域ではない、という意味ですね。

そういえば、羊皮紙に描かれた世界地図は、わたしの世界の地図とよく似ています。大きく違うのは、アメリカ大陸がまるまる抜けていることとくらい?

おばあちゃんは指をさして、中国やロシアのあたりを「ここが新と旧に分かれた二つの帝国、」ヨーロッパのあたりを「ここがあたしらの住んでる此処、連合国。大小さまざまな島から成る。」最後にオーストラリアに位置してる馬鹿でっかい島をさして「これが騎士団領だ、まぁ大まかなもんでね、それぞれ小さい国が頑張ってたりもするよ。」と、言いました。

大陸の配置とか、パッと見はよく似ています。けど、よく見ると全然違っています。ヨーロッパ……今わたしが居るここですが、陸続きの場所はほとんどありません。全部バラバラの島なんです。だけど、ここってイタリアに似たブーツ型だなーとか、そんな感じに

似ています。
……うーん。
アメリカ大陸、どこ行っちゃったんだろう？
そして、おヘソの島……位置的には……日本、なんですよね……。

## 豚にどんぐりを食べさせる日、5日目

「昨日はノイッシュからドラゴンの話を聞いたんだろう？」
おばあちゃまに聞かれて、頷きました。後で色々な人にも話を聞いておいたんですが、ノイッシュさんの話を鵜呑みにしなくて良かったです。偏見を持ってしまうところでしたっ。
竜族は、別に人間嫌いなんかじゃなくて、逆に人間を保護するために色々と歴史に介入している魔族なのだそうです。そして、普段は空を飛んであちこちを移動して回ってるせいで、ほとんど姿を見ることは出来ないんだとか。だから、ノイッシュさんはかなり珍しいんだそうです、村の人たちにとっては。
そしてドラゴンというのは、わたしの世界でも言われていましたが、こっちでもやっぱり、とても強い力を持った存在という事で、村の人はみんなノイッシュさんを怖がっていたりもします。
喋ってみたら、のほほ～んとしたヒトなんですけどねぇ。

「今日は、そうだね……。バードマンの話でもしてやろうかね。」
思わず身を乗り出してしまいました、おばあちゃまがニッて、ヤな笑顔を浮かべます。恥ずかし。
「アヤカはほんとにリグが好きなんだねぇ。でもね、気をつけな。あいつは典型的なバードマンだ、節操なんて文字は連中にはないからね。」
う、それはなんとなく解かってます、おばあちゃま。
なんてゆーか、リグは女の人大好きだし、女性の知り合いもものすごく多いし、それを隠そうともしないどころか自慢げですからっ。
「まず、魔族それぞれに一言で言い表せる特徴ってのがあるのさ。ドラゴンは『凶悪』、エルフは『狡猾』、人魚など魚獣は『冷徹』、バードマンなど鳥獣たちは『獰猛』と言われている。一般に獣人種

は『凶暴』とされているが、中でもバードマンは非常に好戦的な事で知られているんだ。」
バードマンは鳥獣種と言われていますが、ワーウルフなどの獣人種と同じ括りでもあるそうです。
「むろん、彼らのほんの一面を指す言葉に過ぎないが、連中は同じ人類でも人間にとっては敵にもなりうるわけだからね、知っとかなきゃならない言葉なのさ。」
この世界はとても複雑で、国家同士のいがみ合いの他にも、種族のいがみ合いだとか、魔族と人間のいがみ合いだとか、純粋の魔族・人間と混血の人々とのいがみ合いだとか、色々とあるんだそうです。
この村はまだそういう問題がないから、暮らしやすいはずだってリグも言っていました。
今でも一部の獣人は人間を襲って食べたりもするんだそうです、この村にもオオカミさんが居ますが、一番美味いのは人間だと言って、舌なめずりしてました。人間は、どんな動物よりも肉が柔らかくて、毛皮もないから食べやすいんだ、とか。

「バードマンは寒さに弱い、あの翼を見ればわかるだろうが、湿気も駄目でね。旧帝国領の北東部まで行くと、ほとんど見かけなくなるんだ。温暖で乾燥した土地が好きだから、連合国にはやたらと多い。
この田舎町ではリグの他には見かけないが、中心地へ行けばゴマンと居るんだよ。船乗りは特に多い、連中の天職みたいなもんでね、海賊の5割はバードマンさ。」
わたしはここへ来る前に一度乗ったきりですが、帆船は乗り合い馬車より多いとか。連合国は島が多いために船便ばかりで、それゆえに海賊もとても多いんだそうです。
あ、乗り合い馬車というのは、四頭立てのとても大きな馬車です。両脇にもう二頭、交代用の馬まで従えているんですっ。すごい迫力ですよー。大都市を結ぶ陸路の要ですっ、市バスみたいなものかも

です。
「で、トリってのはアレだね、水浴びが大好きらしい。エルフも綺麗好きだが、デリカシーはあるからね、公共の水場ですっ裸で泳いでたりする馬鹿モンはたいていがバードマンだ。」
あっ、想像出来ちゃいます、皆に顰蹙買ってるリグの姿が……。

「アヤカにはこっちを先に教えておくんだったか。まず、船乗りってのはね、普通以上に気が荒い連中だ、そんなヤツ等に混じって仕事してるリグのヤツも大概だと思っておくんだよ。
そして、身持ちは恐ろしく悪い。港ごとに情婦が居ることが、連中にとっての自慢だ。リグだってそうさ、多く居過ぎて名前を忘れて困る、なんて言ってる男さ。」
ムカムカする話ですけど、本当です、でもこの世界ではそれが普通の感覚らしいのです。浮気しない男がいいなら、都市部に住んでる役人にでも当たれ、という話だそうです。
「ま、船乗りの女房といえば尻が軽いという意味の諺だし、どっちもどっちかねぇ。」
この世界の貞操観念は、わたしが居た世界とはまるっきり逆みたいなんです。人の善悪の概念とかが脆くて、悪事も平気だったりするのは、宗教がとても弱くなっているからだ、ってノイッシュさんは言ってましたが。

騎士団領と両帝国は宗教の関係で一夫一婦制だけど、ここ共和国は一夫多妻制です。お金持ちだけですが、平均的に三人くらいは奥さんが居るそうです。そして、他の三国は貧乏でも奥さん居る人が多いけれど、共和国は独身男性がとても多くて、社会問題なんだそうです。……ハーレム止めればいいのに。
「実際、若者の間ではハーレム願望は醜い、という価値観が広がってきているよ。結局、金持ちの脂ぎった中年どもが目の色を変えて女漁りしてるのが実態だからねぇ。そんなモノばかり見てれば、幻

滅もするだろうさ。」
　若い人たちには恋愛の機会が減るわけですもん、当たり前だと思いますっ。
　この国では、女性達は金持ちに嫁ぐことばかり考え、行き遅れ寸前にならないと身近な男には見向きもしない、とリグが以前言っていました。他の三国に比べて、独身男女ばかりが溢れているって。
　若いうちから金持ちな奴なんて少数だから、ほとんどの女は行き遅れるんだ、とか。
「国ってのはね、人がどんどん増えてくれないと困るんだ。戦争になれば人が要る、戦争を抑えるにも国力というカタチでやっぱり人の数だ、だから若いうちに早く家庭を持って子供を産んでほしいもんなのさ。特に中流以下の層には増えてもらわなくちゃ、労働力が減ってしまう。
　アヤカには教えておいてやろうかね。……実は、裏で国の偉い連中が扇動してんのさ、ハーレム持つヤツ等はブタ野郎だ、ってね。」
　お茶目な笑顔で、おばあちゃまがウィンクしました。……割と、切羽詰ってるみたいです、この国……。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5308w/

細腕異世界繁盛記（なんちゃってっ）

2011年9月30日03時28分発行